

海外実習報告書

氏名 岳崎 泰雅

1 実習施設名

Marien hospital witten

2 実習期間

2026/1/5~2026/1/30

3 実習施設の概要

【基本情報】

- 正式名称: Marien Hospital Witten
- 運営母体: St. Elisabeth Gruppe
- 所在地: Marienplatz 2, 58452 Witten, Germany
- 設立: 1858 年

【規模・設備】

- 病床数: 約 360~500 床（中規模から大規模に分類される地域の中核病院）
- 年間患者数: 入院患者 約 21,000 名、外来患者 約 42,000 名
- 主要な診療科:
- 小児科
- 小児外科
- 一般・消化器外科
- 産婦人科・周産期センター
- 内科（循環器、消化器等）
- 整形外科・外傷外科
- 血管外科
- 形成・再建・美容外科

【施設の特徴】

i. 高度な専門性と連携:

特に小児医療（小児科・小児外科）と産科が連携した周産期医療に強みを持ち、地域における小児医療の拠点となっています。小児外科では、低侵襲手術（ラパロスコピー）やロボット支援手術（ダヴィンチ）などの最先端技術を積極的に導入しています。

ii. 教育・研究機関としての役割:

ルール大学ボーフムの教育病院として、医学生の臨床実習を積極的に受け入れており、教育体制が非常に充実している。



4 Marien hospital witten 病院を志望した理由

私は将来、国籍や文化、医療資源の違いによって医療の質が左右されることのない世界を目指し、国際的に活躍できる小児科・小児外科医になることを志しています。その第一歩として、日本とは異なる医療制度・価値観の中で子どもと家族に向き合う経験を積むことが不可欠であると考え、本プログラムを志望いたしました。

ドイツは、質の高い医療制度のもとでチーム医療が深く根付いており、医師だけでなく看護師、心理士、ソーシャルワーカーなど多職種が対等に意見を交わしながら、患者一人ひとりに最善の医療を提供していると伺っています。Marien Hospital Witten は、地域医療の中核を担いながら教育にも力を注いでおり、実際の臨床現場において、多職種連携がどのように日々の診療や学生教育に反映されているのかを、五感で学べる理想的な環境であると考えました。

特に小児医療においては、子ども本人だけでなく、保護者や家庭環境、社会的背景を含めて支える視点が不可欠です。異なる文化や価値観を持つ家族と向き合うドイツの小児医療の現場で、どのように信頼関係を築き、子どもにとって最善の選択を共に模索しているのかを学びたいと強く願っています。

また私は、将来的に「国境なき医師団」をはじめとする国際医療団体での活動を視野に入れています。そのためには、医療技術だけでなく、限られた資源の中で柔軟に思考し、異なる背景を持つ人々と協働する力が不可欠です。ルール大学が掲げる「研究と臨床を結びつけた教育環境」の中で学ぶことで、医学的根拠に基づいた思考力と、国際社会で通用する視野を養いたいと考えています。

本実習では、日本とドイツにおける小児医療および地域医療へのアプローチの違いを比較しながら学び、そこで得た気づきを将来、日本そして国際社会での医療実践に還元することを目指しています。Marien Hospital Witten での学びは、私が国際的な舞台で子どもたちの命と未来を守る医師へと成長するための、かけがえのない礎になると確信しています。

5 実習に向けての準備

【語学・コミュニケーション】

- 医学用語の習得：小児科・小児外科領域で頻用される医学用語について、独・英・日の対照表を作成し、診察や手術室での会話に備えること。特に「症候（症状）」に関するドイツ語表現を事前に学習。
- 英会話のブラッシュアップ：医師やスタッフとの円滑な意思疎通のため、オンライン英会話等を利用して、医療現場で使われる定型フレーズ（問診や指示の受け方）の復習を行う。

【医学的知識】

- 解剖学の再確認：手術見学や助手業務を想定し、骨盤腔や腹部の解剖学的構造を英語で復習。
- 日本の医療制度の整理：現地の医師や学生と議論できるよう、日本の国民皆保険制度や小児医療の現状について英語で説明できるよう準備。

【事務手続き・生活準備】

- 必要書類の整備：ワクチン接種証明書や健康診断書、保険加入手続きなど、大学および病院側から指定された書類を不備なく揃えました。
- 現地生活のシミュレーション：Airbnbでの滞在に向け、現地のスーパーの利便性や日曜日の営業制限などの生活情報を事前に調査しました。また、冬期の渡航であったため、十分な防寒・防水対策（衣類や靴の選定）を整えました

6 実習内容

【実際に行ったこと】

外来・病棟・手術室の全域で実習を行いました。

- 外来・病棟業務：術前診察の立ち会い、聴診や触診、エコー検査、創部処置のサポートを行いました。また、ICU 回診や、土日の入退院情報を共有する週明けの長時間カンファレンスにも参加しました。



- 手術室実習：清潔状態での手洗いを重ね、縫合や糸切り等のアシスタントに従事しました。主な経験症例は、幽門狭窄症（ラムステッド術）、V-P シャント留置術、Hirschsprung 病生検、短腸症候群疑いに対する試験開腹、GERD に対するロボット支援下手術（ダヴィンチ）など多岐にわたります。

- 臨床手技：採血や点滴ライン確保の練習、対光反射の



確認など、可能な限り実践的な手技に挑戦しました。

【自身が学んだこと】

- ・ チーム医療と教育体制：職種間の垣根が低く、レジデントがプロフェッサーに気軽に質問できるフラットな職場環境を学びました。また、学生が給与を得ながら責任を持って働くドイツの医学教育の実態を目の当たりにし、主体的に動く重要性を再認識しました。
- ・ 患者中心の環境整備：小児病棟に親が寝泊まりできるベッドが完備されている点や、多忙な中でも笑顔を絶やさない医師の姿勢から、患者とその家族に対する精神的ケアのあり方を学びました。

【苦労したこと・課題】

- ・ コミュニケーションの壁：物心のついた年齢の小児患者さんを診察の際に説得し、信頼関係を築くことの難しさを痛感しました。
- ・ 技術的な不足：手術アシスタントを通じて、自身の縫合技術や解剖学的知識の未熟さを実感し、今後の課題として明確になりました。

7 生活環境

【住居・利便性】

実習期間中は Airbnb を利用して部屋を借りました。立地はやや郊外の閑静なエリアでしたが、近隣にスーパーマーケット等の商業施設が整っており、日常生活において不便を感じることはありませんでした。



【言語・コミュニケーション】

現地では基本的に英語が通用するため、日用品の買い物や街中でのコミュニケーションで困る場面はほとんどありませんでした。

【休日・余暇】

土日の休日を利用して、近隣の観光地へ足を運ぶことができ、現地の文化に触れる良い機会となりました。ただし、ドイツの習慣として日曜日はほとんどの商店が閉業するか、営業していても夕方には閉まるため、食料品の買い出し等は計画的に行う必要があります。



【気候・アドバイス（次回の実習生へ）】

冬期のドイツは雨や雪の日が多く、冷え込みも非常に厳しいため、防寒・防水対策が必須です。実習時期を選べるのであれば、気候が穏やかで過ごしやすい春夏シーズンに渡航することを強くお勧めします。

8 反省点

【言語面における課題】

実習前にある程度の語学準備は行っていたものの、実際の臨床現場では、特に「症候（症状）」に関するドイツ語の語彙力不足を痛感しました。医師同士の会話やカルテの理解だけでなく、患者さんとのコミュニケーションにおいて、痛みの性質や気分の変化を正しく聞き取るためには、症候に関する医学用語をより深く習得しておくべきだったと反省しています。

【医療英語と基礎知識の関連性】

医療英語に関しては、単に単語を覚えるだけでなく、解剖学の知識を英語で盤石にしておくことの重要性を強く実感しました。特に手術室でのアシスタント中やエコー検査の際、英語で指示や説明を受ける場面では、解剖学的構造の名称が共通言語となります。解剖学を英語で理解できていれば、より素早く、かつ正確に現場の議論についていくことができたと感じています。

【今後の展望】

この悔しさを糧に、将来「国境なき医師団」などの国際的な医療現場に立った際、より円滑に、かつ主体的に診療へ貢献できる能力を磨いていきたいと考えています。



最後になりますが、本実習を快く受け入れ、多大なるご指導を賜りました Marien Hospital Witten の先生方、ならびにスタッフの皆様にご心より深く感謝申し上げます。また、本プログラムの実施にあたり、多方面で多大なるご尽力をいただいた先生方、事務の皆様にも厚く御礼申し上げます。慣れない環境での実習でしたが、諸先生方の温かいご指導と、医学生をチームの一員として迎え入れてくださる現地の寛容な姿勢のおかげで、日本では得られない貴重な経験を積むことができました。今回の実習で得た学びと感動を糧に、将来、国際的な視点を持つ医師として社会に貢献できるよう、より一層学業に励む所存です。皆様、本当にありがとうございました。